

紹介します！安全・健康職場

中小規模事業場労働安全衛生評価事業(GSC)の登録、社会福祉施設第1号に聞く

社会福祉法人 朝日園

(社福)朝日園(香川県高松市)は、1976(昭和51)年に「重度身体障害者入所授産施設」として創設された。現在は8事業(施設・事業所)、83人の職員が、200人を超える利用者を支えている。

8つの施設・事業所(朝日園、朝日平成園、すすらん、あい、あさひ、ホームヘルプあさひ、朝日つばさ、朝日ヶ丘)にはそれぞれ違った目的がある。たとえば、地域の在宅障がい者に、社会適応訓練や創作的活動などの場を提供し、利用者の自立促進、生活の質の向上を支援することを目的とする施設や、福祉サービ

スや制度の情報提供、利用についてのサポートを行う施設である。

今回紹介する8事業の一つ「障害者支援施設 朝日園の就労継続支援A型・B型」では、雇用されることが困難な障がい者に、入所または通所で、利用契約・雇用契約による就労機会の提供や、一般企業などでの雇用に向けた支援、就労に必要な知識や能力の向上に必要な訓練などを行う障がい者支援施設で、主に印刷業務と軽作業を行っている。

2017(平成29)年9月19日、同法人は中災防の「中小規模事業場労働安全衛



写真1 登録認定証の授与

生評価事業（愛称：JISHA グッド・セーフティ・カンパニー、略称：GSC）」（以下、評価事業）の登録事業場となった（写真1）。この事業への取り組みは、2013（平成25）年度より開始されたもので、社会福祉施設としては初の登録事業場となる。

そこで、高橋英雄理事長（以下、高橋理事長）に、同法人の安全衛生活動の取り組みについて、話を伺った。

■ 利用者がケガをしない、ケガをさせないために

安全衛生活動に積極的に取り組むことになったきっかけについて高橋理事長に尋ねると、「開所から40年がたつ中でさまざまな事業が増え、職員、利用者も増えてきました。一つの施設だけであれば、毎日顔を合わせるの、たとえリスクがあったとしても会話の中で伝わる場合があります。しかし、施設が増えてくると、それぞれの施設においてリスクが異なり分かりづらくなってきました。たとえば、印刷などの作業を行う朝日園で

あれば、印刷機械を動かすことでのリスクや重いものを持つことによるリスクがあったり（写真2）、介護施設（すずらん、朝日平成園）であれば、利用者を車椅子やベッドへ移乗するときの転倒のリスクが発生したりします。それぞれの施設の職員は自分のところのリスクは分かっていますが、法人全体として、リスクが何十、何百とあることを把握して、それを一つひとつつぶしていくことができれば、利用者に当法人の各施設を健康でケガすることなく利用してもらえると考えました」という答えが返ってきた。

この高橋理事長の思いには、「利用者がケガをしない、ケガをさせない、安全でいてもらうため」という願いがある。

■ 安全・安心への取り組み

同法人では、評価事業の登録を目指し、3年かけて安全衛生活動の体制づくりに取り組んできた。「GSHMS（グッド・セーフティ・ヘルス・マネジメントシステム（＝朝日園版 GSC）」の評価規程の整備は、その成果の一つといえる。

しかし、職員も利用者も、はじめは「なぜ、安全衛生活動を進めていかなくはないのか」がよく分からず、戸惑いがあったようだ。それが実際に進めてきた3年間で、「すごく大事なことだ」と分かってくれたという。

具体的には、以前から壁に5Sの定義（写真3、94頁）は掲げていたもののあまり定着していなかったが、活動を本格化



写真2 大きな「段差注意」の表示で注意喚起（利用者が使う印刷機）

させたことで職員に5Sが定着し、「まず、片付ける」ことを考えてから行動するようになったという。さらに、職員の介護の仕方、支援の仕方に意識の変化が出てきた。たとえば、「床がぬれていたら転倒の危険がある」という場合、床を拭いて終わるのではなく、「なぜぬれたのか」というところまで考えるようになったという。

そして、対応策まで考えるようになり、職員自らが危ない部分には「とまれ」という表示をつけるようになった（写真4）。

また、利用者（印刷作業をしている人）にも変化が見られるようになった。利用者が移動する際、「そこに段差があるから注意しないとつまずく」など、何かあったときのリスクも考えながら行動してくれるようになった。さらに、日常会話の中に「リスク」という言葉や、少しでも危ないと感じると「ヒヤリ・ハットの報告を書きなアカン！」という言葉が自然に出てくるようになった。このような変化や成果が見えてきたことから、職員にも利用者にも安全・安心への取り組みが、かなり浸透してきていると言えるだろう（写真5）。

社会福祉の業界では「安心・安全を目指す」という言葉は広く使われる言葉だが、実際に行動に移している施設はまだ少ない。しかし、同法人では「GSHMS」による安全衛生活動の取り組みによって、この言葉への理解がより深まり、そのために何をしなければいけないのか、PDCAはどう回せばよいの

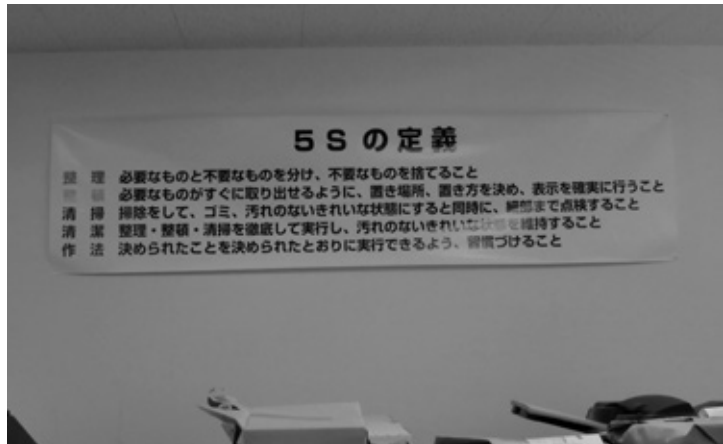


写真3 5Sの定義



写真4 「とまれ」の表示

かについて、その方法がよく分かってきたとのことである。

高橋理事長は、「安全衛生活動のやりっぱなしは許されない」と言う。そのため、全施設で6人のリーダーがいるが、その各リーダーたちがさらに安全衛生活動に関する感性を身に付けていくことで職員が育成され、将来のリーダーが育ってほしいと考えている。

■ 今後もさらに安全衛生活動を進めていく

今後も同法人の施設は増えていくのか高橋理事長に聞いてみると、「社会や地域で必要な事業や要望があれば、検討してやっていかなければいけない」と考えつつも、「それにはまず職員のレベルアップが必要」との答えが返ってきた。「ハード面での安全対策ももちろん必要だが、職員をどう育成していくか、現在いる83人の職員が欠けることなく、安心して働いていけるかを考えなければいけない。それには、健康やメンタルヘルスなどのソフト面における対策も必要になってくる」という。

「朝日園は安心して働ける」となれば口コミでそれが広がり、新しい人が採用されるという流れになる。「そうした流れができれば、新しい事業、地域で必要とされる事業もやっていけるし、反対に、やらなければ施設として生き残っていけないかもしれない。職員の皆さんは今でも大変だが、必要なことはやってい

かないといけないと思っている。これには、安全衛生活動も重要な項目になってくる」とのことであった。

今後の核となってくる安全衛生の取り組みについては、「今は利用者目線で行っているものが多いが、次の段階では職員の腰痛予防など、職員の安全衛生面を一步でも進めていければいいなと感じている」ということであった。

■ 社会福祉施設の安全衛生

高橋理事長に話を伺う中で、朝日園で「働く人」とは、ここで働く「職員」と、この施設の「利用者」であるということに改めて気付かされた。

介護施設の安全衛生というと、利用者を介護する際の職員の腰痛対策を思い起こすが、この朝日園のように印刷などの作業を行っている人がいる施設であれば、重量物の運搬や有機溶剤の使用による製造業と同様のリスクがあり、さらに職員、利用者ともにケガをしないように対策を考える必要がある。

そこには、製造業の安全衛生と違った社会福祉施設特有の取り組みが必要なことを痛感させられた。

同法人の理念である、「私たちは報恩感謝の心を持って 福祉の支援を必要とする人々に 希望の明かりを灯し続けます」の下、職員が一人も欠けることなく、「利用者が普通に利用して、帰るのが普通」であり続けることを願う。(中災防中国四国安全衛生サービスセンター)



写真5 印刷機の使用時に指差し呼称